

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 古賀 義顕

本論文の第1部「日本語論文」は、現代ロシア語における音韻構造の分析記述とそれに関連する周辺的な問題の検討とを含む6章から成る。第2部「ロシア語論文」は、ロシア語による国内学術誌掲載論文(第1部第1章に相当)と、同じく、ロシア学術誌掲載論文(第1部第3章に相当)との、それぞれの改訂版から成る。このうち第2部所収論文については参考論文として扱い、第1部所収論文の評価の際に併せて考慮した。

母音体系を論じた第1章において、古賀氏は「現代ロシア語のいかなる音節もすべて子音ではじまる」とする作業仮説により、単音[i]と[i̯]について、[i]を/j̥/, [i̯]を/ɨ/とする新しい解釈に立脚し、他の4つの母音音素の解釈との整合性をはかる試みを示している。また、短母音のそれぞれに対応する、各母音音素が/j̥/を従える構造の二重母音を新たに音素と認め、従来の「モスクワ音韻論学派」と「ペテルブルグ音韻論学派」による解釈がはらむ対立、不整合性、矛盾の克服をはかっている。

続く第2章では、第1章を補完する目的で、現代ロシア語に現れる音素と対応する音声の目録の総合的記述の試みがなされている。中心的な論点は、10音素から成る母音体系(従来は5音素ないし6音素)と、37音素から成る子音体系(従来は34音素)である。

第3章では、単一の子音字母で書かれる現代ロシア語の前置詞 k, s, v が、後続する語の語頭音節の構造により、それぞれ3つの異形態で現れる問題が取り上げられている。このうち、/ka/, /sa/, /va/となる変種は考察の対象から除外され、子音1つで実現する場合の変種の無声と有声の選択を決める条件が詳しく分析記述され、かつての R. Jakobson による観察との相違は通時的変遷の結果とされる。

第4章では、現代ロシア語の音韻論的音節の構造を全面的に記述するため、語中の音韻論的音節のすべての境界のすべてを探る目的で、その考察の経緯と、語頭子音束および語末子音束を網羅する作業の膨大な結果が示されている。

第5章では、川上蓁氏の提案したロシア字翻字法が従来の種々の方式と比較され、その優秀性が指摘され、また、本論文第1章の主張とつながる古賀氏の改良案が示されている。

第6章では、伝統的に IPA (国際音標文字) に近いペテルブルグ学派によるロシア語の音声表記が詳しく紹介される一方、ロシア文字による音声記号を使い続けているモスクワ学派の表記法が批判的に検討されている。

審査においては、特に第1章で示された画期的な論旨の独創性と、さらにそこからもたらされる教育上のメリットが高く評価された。また第2章以下に見られる発想の卓抜さ、作業の精密さ、資料的価値も本論文の美点として数えられた。他方、いくつかの論点になお検討、再考、補足の余地があり、また本文や注、文献表示に誤植が少なからず見られることも指摘されたが、本論文の功績を損なうには至らないと審査委員会は判断した。

以上により、本審査委員会は本論文が博士(文学)の学位授与に値するものとの結論に達した。